

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	感情教育待望論（その八）：“夢”作文と個性：その通性を求めて
Author(s)	上原, 輝男
Citation	児童の言語生態研究, 14 : 2 - 12
Issue Date	1990-11-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045153
Right	
Relation	



“夢”作文と個性

その通性を求めて



上原輝男

1.

最初に断っておかねばならない。私どもは精神分析学や臨床心理学を専門とする者ではない。ほとんどが、学校教育現場教師である。しかし、本テーマを掲げて所要の見解をまとめようとするのは、決してその方面の専門家の真似事をするでもなければ、徒らに深層心理を覗き込みたいのでもない。

たえず子どもの傍にあって、その成長の動向を見守る者にとって、子どもの語る夢の話

や、そうでなくとも、頭には思い画いているにちがいないイメージを以心伝心される時、現場教師だけが知っている法悦に似たものを感じ取っている確かさの故である。

平成新学習指導要領に、個性を生かすということが初めて採択されたからいうのではない。むしろ、心ある現場教師にとっては、個性を生かすなどということばに功利主義的臭みや世論便乗主義的甘さに嫌悪感さえ抱かせられている者も少なくない筈である。

第一、個性の定義さえ覚束ないものを生かすなど強要せられては経験の乏しい先生など

子どもにふりまわされて、手も足も出なくなるだろう。今日的流行用語としての個性を教育用語とするのでは我が俣とさえ区別がつかなくなる。

私どもは子どもたちに「夢」の作文を書かせ、膨大な量の作文を読んだ。

まず、私どもがなぜ子どもたちに「夢」の作文を書かせたかの理由から述べねばなるまい。子どものグループは、昭和五十七年から三年間「子ども文化の文化人類学的研究」に参加して、「子どものイメージ運動に関する四つの仮説」として発表したことがある。(『子

ども文化の原像』NHK出版・『世界の子ども文化』創元社）方法的には、子どもたちに「穴」という課題作文を書かせ、その内容の多くが、経験に先立つところのイメージ（子どもはそれを先験的イメージと呼んだ）によるものであることを指摘したものである。

それ以後、私どもの関心は、子どもの無意識層の研究から離れられなかったといつてよい。冒頭に述べたように、私どもは「夢分析」の専門家ではない。しかし、「穴」作文の時と同じように、この子たちを動かしている潜在世界の広さと深さ、そして巧まらずして、自ずから成る組み立てに驚かないわけにはいかなかったのである。

それがなぜそうなのかは、私どもは専門家に任せればよい。だが、私どもが、抱え込んでいる子どもたちの心の活動を見越さなくては私どもの仕事は成り立たない。断言して憚らないことは、「夢」作文は、いわゆる一般的な生活作文以上に、筆が走るのである。このことは低学年が一番はっきりしている。おそらく、もう大人には失われてしまった実験性がそうさせるのだと思う。顕在的な目的を置かない無心の発動がそうさせるのだと思う。現代流行語のようになってしまった見かけ倒しみたいな個性と区別できるところである。

「夢作文と個性」と題したが、意図するところは、一片の夢作文によって、その個性を判

定しようとするのではない。私どもが求めているのは、本性としての個性を見定める視点視座の確定である。

今回の資料を通覧して考えさせられたこととして

- 一、無心の発動性、あるいは牽引性。
- 一、意識の残像、もしくは意識の集中するところ、その離れるところ、もしくはその断続。

一、情動のともない具合。
以上三点を挙げることができ。

2

以下、「夢」作文を、低・中・高学年に分けて実例を挙げ、その特徴を述べてみたい。

というのは、年齢発達に従い変化があるからである。但し、この変化も、イメージ自体が変化するといつてよいのか、イメージ自体がそのまま、イメージとわたしが対応する仕方が変化するといつてよいのか、未詳である。ただ、低学年の次の例などは、まず子どもにとって夢と現実とは未分化の状態からスタートすることは確かである。あるいは、イメージとは絶えずわたしを内包しており、夢と現実との未分化、分化などという言い方は観念的目安にすぎず、むしろ、秀吉の辞世のように、露と落ち 露と消えにしわが身かな

難波のことも夢のまた夢

を、人生の最終段階におけるイメージとするなら、現実もまた夢と思っているわけで、分化どころか、子どものスタートとしての夢のとなえ方は人類の本来性というべきであるとも思われる。だからこのことを先に無心の発動性と言ったのである。

（低学年）（一学年～二学年）

一年女

ほしかわ まゆみ

わたしは、よるふくろうのおうさまに、
たからもののあるばしよを、おしえてもらいました。そして、一しゅうかんぐらい、たからものをさがしました。

そして、つぎのひのことでした。

みつきりました。

だから、とってもうれしかったですよ。

(A1)

この作文は、誰が読んでも、夢と現実との混在をいうのではないだろうか。また少しでも子どもの側につく人ならば、混在などいわずに、融合の語を選ぶだろう。筆者の主観からいおうなら、無心の発動性だけに頼り切っているところが何ともいじらしい。厳密にいうと、この作文は、前半、後半と分たれるところで、夢が覚めて、その夢の、いわゆるおかげによって現実に宝物の発見になるのか、あるいは全て夢の中での出来事とするのか、いずれか一方とする判定はむずかしい。さらに今一つの考え方が出来る。夢と現実の二元

的把え方ではなくて、子どもは夢、現実を問わずイメージの世界に住んでおり、その確認、認承が現実世界だと思わせられる。だから、仮りに、この作文で語られていることが事実であったにしろ、それは偶然とか、あるいは夢想であるという判定以外の判定を必要とする。たとえば、この子は、よるふくろうのおうさまに、たからものあるばしよを、おしえてもらったのである。おしえてもらった限りにおいて、この子はその実現を確認するのである。その場合、その実現の確認は夢の中であれ、現実であれ、関係ないことになる。現実であり得ないなどというのは、イメージの世界に住むことを忘れた大人の言でしかない。実際に、その様な大人の目には現実にどう見ても宝物とは言えないものを見つけても、子どもは、これぞ、ふくろうの告げし宝物なりとなるのであろう。この子に現実がないのではない。「だからとつてもうれしかったですよ」とイメージを説明するところがそれである。

筆者は何よりも、低学年に共有しているイメージの強力な暗示性、あるいは誘引性を述べねばならないと思う。

一年女 **ゆめ** (こわいゆめをみた) (成瀬台)

わたしは、なつとき、ありをいっばいふんづけてしまいました。ふんづけてたら、そのうちくらくらくなりました。おう

ちにかえて、ごはんをたべて、おふろにはいってねました。

こわいゆめをみました。

まずは、二かいにゆうれいがいて、おふろばいくと、ちっちゃいおじいさんのにんぎょうが、おふろのなかで、てをふっていました。こわいのでそとにましました。うちのまえにしんごうきがありました。こわかったです。

こわかったです。

A1に較べると、これにはイメージのもどき(イメージが反芻されること)がつきすぎているが、それも、先に述べたイメージの強力な暗示性の故ではないだろうか。前おきがつくことの理由は、イメージ活動の余波と考えているが、これは専門家にまかせたい。つまり、この前おきを、この夢見の原因説明としてか、更には、ありを踏み殺した懲罰、もしくは後悔の念を先行とするか否かは私どもにはわからない。ただ、「まずは二階に」というところあたりは、ふつう一年生の用語ではないものが飛び出しているのであって何とんでも、イメージの誘引性としか言いようがないであろう。

また大いに興味をそられるのは、「こわいのでそとに出」たということと、「うちのまえにしんごうきがある」という連想である。信号がその時、赤であったのか青であったのか

それともと考えさせられるが、これも大人のケチな想像であって、信号機そのものがおそろくは予感を誘う映像なのであろう。

次のB1などは、おそらく専門家にとつてはそれほど珍らしいものではあるまい。期待と反する現象が起る。しかも最も信頼するものから虐待を受ける。しかし、この文章のどこにも驚きや反撥反抗はうかがえないところがミソで、まるで見本のように出て来たので取り上げた。

一年男 **ゆめでかなしかった**

ぼくとおかあさんでレストランにいったゆめをみた。おかあさんがハンバーグをたのんだ。ハンバーグがきた。おかあさんはぜんぶハンバーグをたべてしまった。ぼくがたべようとしたら、おかあさんがたべてしまった。ぼくがちよっとまっていったときは、もうはんぶんたべてしまった。ぼくはおかあさんに、なんでぼくもたべちゃったの、ときいた。おかあさんはおこったように、車にのって行ってしまった。ぼくはかなしかった。そしたらめざましどけいになっておきてしまった。そのつづきをぼくはみたかったなあとおもった。

一見、現実的そうに見えるこの夢も、私ど

もは、やはり低学年の特徴であるイメージの誘発性によるものと思っている。現実ならば、この子は怒り不平不満を言い立てるはずである。ところが「おこったように」見えたのは母親なのであり、この子はおきざりという仕打ちを悲しむ方が先なのである。この子の過去の現実これと同様の経験があつてのこととは考えられない。私どもは、イメージの運動自体に、あるいはイメージの元型に、被虐待への関心があるのではないかと思つている。

「そのつゞきをぼくはみたかつたなあと思つた」と結んでいふことも見逃せないところであろう。特にこのB1の資料は現実的素材であるだけにその処理は、素人分析を露呈せざるを得ないが、それをおそれず筆者はもう一つ言い添えたいことがある。

それは、以上提出の三例は、「うれしかった」「こわかった」「かなしかった」の印象語を残している。これは筆者が意図して選んだわけではない。出来るだけ素朴に、潜在的と思われる夢を語っているものを集めたら、偶然、こうなつたのである。但し今、特に付記したいことは、先の二例に較べて、このB1が現実的なのは、その印象がかなしいで結ばれるものであつたことが左右しているのではないかという卑見である。

しを日本語ではかなしいというのだと教えられた気がしたのである。

先にことわつたように、決して作爲的に資料を選んだのではない。しかし、B1に続くB2は何と対比的なことか。それをわれわれ日本人は「しあわせ」という——とでもいへそうなのが資料B2である。

一年女 ゆめ(聖徳)

わたしは、いまじよおうになつてしまつた。といつても六さいぐらいでした。すてきなドレスをきて、かんむりをかぶつて、ぜいたくをしてしあわせでした。けらいがいっぱいいいて、ぜいたくなしよくじをして、けらいたちにめいれいして、すきなだけおやつをたべて、すきなだけあそんでいました。よるもひるもあさもおやつのごはんでした。りようりはじよおうのいうとおりにします。ほんとにあのときはしあわせでした。

(B2)

「すきなだけおやつをたべて、すきなだけあそんで」「よるもひるもおやつのごはん」すべては「女王の言う通り」というところに注目しなければならぬ。おそらく、これも、日頃の欲求不満の裏返しと見るのは当るまい。いわゆる夢見心地に誘われ、ば誘われるだけ日本人は「しあわせ」というのかもしれない。そんな折り、「頬を抓る」という習俗語がある

のも、頷けるところであつた。現実生活にひきずり下ろされる時悲しいと言ひ、現実から飛躍する時、しあわせと言ひだけでなく、悲しみの夢ではその続きを見たいと願ひ、しあわせの夢は、「あの時はしあわせでした」と完結してしまふのは何故か。イメージの誘引性を言う場合、なお課題として残るところである。

筆者はある公の研究会場でこれらの夢作文を取り扱い、低学年では、分母を夢とし、分子を現実とすると見て大略、誤りがなことを発言した。低学年児は、イメージの誘導に従つて、現実生活しているという意味である。続けて二例を引用してみたい。

二年男 はずかP夢(聖徳)

ぼくは、えきでぶらぶらしてました。そしたらいきなり、光がふつてきて、ズボンがぬげて、どこかにとんでいってしまつた。あわててかえろうとすると、おしつこがドボーと出て、パンツがビショビショになつてしまいました。もうほんところがるようにしていえにかえつてきかえました。(ここからがホントのところ)「はっ」としておきあがると、もう朝で、なんとおねしょをしていました。(この作文は、ぜつたいにびつぱらにのせないでください。そのりゆうは、毎日

つけているほうの作文をのせたいので
す。

(C1)

二年女 ゆめ(玉川)

電車のゆめを見ました。ホームが少し
しかなくて、線ろがいっぱいあるので、
線ろに電車がこない時は、線ろでまっ
ている人もいて、私は線ろでまっ
た。そして、一回目はすぐどけたのに、二
回目はホームに上がらないといけなかつ
たので、ホームの人たちにいそいで手
かしてもらったけれども、もう少しでひ
かれるところだったので、とてもこわ
かったです。こんどおなじゆめを見たら、
もう少し早くにげようと思います。

(C2)

改めて、付記に及ばぬほどながら、C1C
2ともに同じく、分母は夢でありながら、本
人が水面に顔を出すところが、真反対となつ
ているところが指摘できる。C1の(ここか
らがホントのところ)と断っている意識の最
も深いところは、夢がおねしよを誘ったこと
に対する驚きがあったといつてさしつかえな
いだらう。それが深いから、最後の添え書ま
で用意してしまうのだと見たい。単に、失敗
の公開拒否を依頼しているのではあるまい。
「そのりゆうは、毎日つけているほうの作文
を」という意味からも、この作文が非日常的
であること、即ち区別されるべき、あるいは

秘められるべき性質であることの主張とも聞
えるのである。

C2はC1に較べて何と楽しい現実対応で
あることか。「こんど同じ夢を見たら、もう
少し早く逃げ」さえすれば、あのようなこわ
い目に会うことはないという知恵である。ま
るで、一端、水面上に顔を出して危いと見る
や、また水面下にもぐってしまうラッコのよ
うである。

〈中学年(三年生) 四年生〉

中学年の夢の特徴として、低学年のところ
で述べた分母と分子が入れ替るように思われ
る。現実を分母とするために、現実願望を夢
とするものが多くなる。だから、意表をつく
ようである。その実、常識的である。夢の素
材、あるいはその扱い方が、現実的だから、
この期の夢作文を対象としては、イメージ停
滞期といえるかもしれない。夢の作文といわ
れて、あんな夢、こんな夢と、単に羅列して
終れりとする例が多いのも、この中学年期で
ある。身体行動が思うようになって、現実事
象の方が楽しくなるからであろうか。それ
ともなつて交友関係も増し、主観から客観を
強いられる時代であるからであろうか。
極く平凡な例としてD1を挙げる。

三年女 自分の見たゆめ(玉川)

私は、前にこんなゆめを見ました。と

でも楽しいゆめでした。私はおにいちゃ
んが二人いて、妹や弟がいなくて、さび
しがっていたら、母に赤ちゃんが生まれ
て女の子だったから、名前を智美にし
ました。それから私がずっとせわをして、
1才になって、とてもかわいい女の子に
なって、せかい一きれいになって、智美
は大金持ちになって、大きくなってとて
もすてきな人とけっこんしてしあわせに
なって、二人でハワイに行つてしまつた
ゆめでした。本当に赤ちゃんがほしいな
あと思いました。

(D1)

既に母性本能がある云々については私ども
は知らないが、夢を妹に託し、その妹の幸福
を願うなどとは何とおそれ入りながら、失
望を感じてしまう。想像力よりも現実思考力
の方がまさり始めるのであろう。命名を智美
とするなど(本人の名は絵美)、「それから
ずっとせわをして」結婚してハワイに行くま
で面倒を見るつもりらしい。因みに担任にた
ずねたところ、妹はいない由。先の一年生の
「しあわせ」とここでいうそれとは大きくち
がう。先のは満足観であった。これでは「し
あわせになつて」という未来願望である。

三年女 自分の見たゆめ(玉川)

私は、ずうっと前に、まほうつかいが
出てきたゆめを見ました。まほうつかい

は子どもでした。でもすごいおてんばで、私をほうきにのせてくれたり、高い木にものぼってしまいます。でもその子は、そうじがきらいで、何を食べても、かたづけをしません。そのかわりに、ぜんぶ私がかかります。私は、まほうつかいにきいてみました。それは「子どもでもまほうつかえるの」と言ったら、まほうつかいは、いろいろなまほうをしました。一番さいしょに出したのは、家の中で星を出してくれました。二番目は、いろいろな花を出してくれました。まだまだあるけどわすれました。こんどもまほうつかいにあいたいです。

(D2)

D2は、まだ、分母が現実だというには異論もあるように、幼さを残しているものである。たとえば、文末の「こんどもまほうつかいにあいたい」などというのもそれ。但し、取って、サンプルとしたのは、夢の中のまほうつかいと対応が、成長のあとを示しているように思えるからである。「でもその子は、そうじが嫌いで、何を食べても、かたづけをしません。そのかわりに、ぜんぶ私がかかります」これがある限り、私の分類では、分母現実組に入れて当然となったのである。

特に、このD1D2は同じ学校、同じ学級で、この両者とも、その表題に「自分の見たゆめ」と記しているが、これは担任の指示が

そうであつたから、そう記したともいえるが、この学級の作文全頁がこう表題しているわけではない。この両者は、担任のその指示の特に、「自分の見た」ところに意識が止まり、D1は妹と私、D2はまほう使いと私の如くに対応関係が強く表面化されたともいえるもので、このように夢の中の人物と自分との対応関係が表面化するのもこの期の特徴といえる。

次のE1E2は、いずれも四年生、先のD1D2は三年生、これはD、Eを学年で区別したのではない。偶然である。E1は万引と盗みを、E2は泥棒侵入を内容とする。夢とはいいなながら、いずれも現実的で、あり得べからざることではなく、その展開も写実的である。学校の友達や肉身兄弟が本名のまま夢の中に登場し、行動を共にするのもこの時期の特徴である。日常の生活意識がイメージを蔽っているといえる。分母が現実というのはこのことである。

小学生全学年を通じて、最も社会派時代といえるかもしれない。

四年男 夢(聖徳)

夢の中でぼくはいつの間にか、西友デパートにいた。そこでぼくは何をしていいかと、何と万引きをしていたのだ！万引きをしているのは、ぼく一人だけではない！吉岡君と光安君もいた。ぼ

くは、

「おい、光君、吉岡ー！何やってんだー。」

そしたら光安君は、

「おう。万引きしているんだ。お前は？」

と言ったら、ぼくは、

「ぼくも万引きをしているんだ。じゃあ、吉岡は？」

とぼくは言ったが、吉岡君は、

「万引きをするのはいけないことだ。わあ、こしようだ。こしようだ。ドッシャン。」

と言っていて、自分も万引きをしている

ようだった。

それで万引きをしているのにレジへ行

ってしまった。店員さんは、

「九万十円です。お金はいりません。」

と言って、ふくろをもらい、へんなへび

の死体をなぜかもらった。

西友の外には、酒井君と長塚君が、カ

ードダス20の話をしていた。ぼくは、

「酒井、酒飲み酒井、長くて長くて長す

ぎて死んでしまう長さん。」と言ったら、

酒井君が「おもちゃ屋で」と言ったら、長

塚君が「いろいろな物ぬすもうぜ！」と

言った。ぼくは、中央線の、本当にはな

いが、北市野とかいう駅で、定期をばら

して中央線に乗った。

そして、武蔵境の「オモチャのエース」

へ行った。ぼくは、黒いベレーぼうをか

ぶり、サンダラスをかけ、マスクをして、いかにもどろぼうそうなかっこうをした。そして、ファミコンをぬすみ、プロ野球カードをぬすみ、お金までもぬすんだ。そして、ジュースの自動はんばいきとか、ガンダムのカードダスのガチャポンなどもぬすんだ。そこへ高橋君が来た。「悪い、先生に言っやろう。……やっぱオレもやりてえな。仲間にオレもいれる。」

と言ったので、高橋君も仲間に入れた。そのとたん、万引き仲間が、未来の穴へ落ちて死んでいった。ぼくも落ちた。そしてぼくは起きた。学校へ来たら、みんな生きていた。ぼくはホッとした。夢の話はこれでおしまい。

(E1)

四年男 昨日の夢(聖徳)

僕は昨日、家にドロボーが入った夢を見た。それは僕がねている時、ガチャガチャ音がした。僕が起きたら、窓がスーッとあいて、そこからほうちようがニユーと出ました。僕はびっくりして、窓をしめようと思いました。でも相手は大人で力があるから、とうとう窓があかされました。

お母さんもお兄ちゃんも起きません。だから、お母さんを起こして、「ねえ、ど……どろぼうが。」と僕は言いました。

するとお兄ちゃんも起きて、「どうしたの」と聞きました。僕はあわてて、「どろぼうがいるよー。」と言った。するとお兄ちゃんが、「ひじようベルを鳴らせばいいじゃないか。」

僕は、その言葉はよく聞こえなかつた。それはこわいからです。僕は、

「あー、どうしよう、あー、どうしよう」と言った。するとドロボーが、

「何ごちやごちや話してんだ。早く金を出しやがれ」

と言った。するとお兄ちゃんは、

「やじゅう、まんじゅう、体重、きかんじゅう、ねんがらねんじゅう、ごりんじゅう、果汁、そうじゅう、けんじゅう、もうじゅう、かいじゅう。」

と続けて言った。

「うるせー、だまりやがれ。」

とドロボーが言った。そう言ったとたん、ひじようベルがとつぜん「ビリビリビリ」となり始めた。お兄ちゃんがならしたのです。

「だれがベルをならしたんだよ。てめー。」

とドロボーは言った。僕は

「だれがベルをならしたの。お母さん。」

「お兄ちゃんはどこにいるの。」

とお母さんが言った。

「お兄ちゃんがベルをならしたんだ。」と僕は、つい大声を出してしまった。

「お兄ちゃんは、どこにいるの」

とドロボーは急にやさしい顔になって僕にたずねました。

「お兄ちゃんなら、むこうにいるよ。」

と僕は言いました。するとドロボーはお兄ちゃんの方へ行ってお兄ちゃんをなぐりました。お兄ちゃんは、きぜつして、ぼったりたおれました。

そんな夢でした。おしまい。

(E2)

E1の書き出しと文末「そのとたん以下が無かつたら、日常生活文と全く区別ができない。E2にしても同じである。とはいっても、この両者が夢の拘引力から脱出しているわけではないことに気づかされる。つまり、低学年で見られた夢遊性は無いとしても、社会派の彼等たちでも、まだ、夢から覚めてホッとしたと書きつけねばならなかったところは見逃せない。

E2の「やじゅう、まんじゅう、体重、きかんじゅう、ねんがらねんじゅう、ごりんじゅう、果汁、そうじゅう、けんじゅう、もうじゅう、かいじゅう」のこれは一体何であろう。類例がないので今のところ何とも言えないが、もし呪言の働きをしているとすれば興味ある資料となるだろう。現代っ子にもまだ古代意識の残像があるとすれば、考古学の発

掘資料以上に価値がある筈である。

〈高学年（五学年）～六学年〉

中学年の傾向を経て、高学年の夢作文は、いわゆる夢物語化するのが特徴である。文体がそうだというだけでなく、大げさに言えば中学年期の社会派的記事から、文学少年少女好みの語り物世界としてあるいはドラマ風に展開している。稀れにはそれが、採集調査記録風なF3の如きものがある。F1F2の例のごとく、登場人物に固有名詞はなくなっている。現実描写ではなく印象的映像風であるとはつきりいえるだろう。そしてF3も含めて、夢の中の「私」「僕」の意識そのものが夢を展開させている。たとえていうなら、夢の私小説期というわかり易いかもしれない。

五年女 私の見たゆめの世界（玉川）

ヒマワリの花が一面にさいている野原の中で、わずれな草をふみながら、知らない女の子と男の子と遊びました。おいかけてっこをした時に、男の子が急に消えてしまい、女の子が泣いてしまいました。すると女の子が、

「あなたが悪いんだからね。もう、東京石田学園に行けない！」

と言って消えてしまいました。今まで美しくさいていたヒマワリとわずれな草が、かれてしまい、ジャングルのように、

木が沢山はえてきてしまい、迷子になってしまいました。そして、あの男の子と女の子がいました。でも首から上だけでした。おそろおそろ、話を聞くと、第2次世界大戦で焼死んだと言いました。この子たちは、五、六才ぐらいの年なのに不思議でした。その時、空が真っ赤になり、戦争の場面になりました。足もとには死体が、……。 「キヤー」と自分でさげんだ声で、自分が起きました。（F1）

五年女 ああこわい（玉川）

ある時、手紙がきて、母は、とても悲しそうだった。「どうしたの？」と私が聞くと、

「誰かが今日の夕方、殺されるんですって。」

私はとてもこわくなった。夕方、祖父も心配なので来てくれた。父も、強い人をつれて帰ってきた。私は、外でおばあちゃんと話をしていた。おじいちゃんと母は、あやしい人がいないか見に行っていた。父も、その強い人が来たので、安心してかばんをおきに行った。父の強い人は、ナイフを持って私の方へ来た。私は、となりですわっているおばあちゃんに、大きな声で何度も、「おばあちゃん」とよんだ。だけど、おばあちゃんは、聞こえなかつたみたいで、私の方に顔をむけ

てくれなかつた。強い人が私のむねにナイフをさした。その時ちょうど目覚まし時計がなった。（F2）

五年男 三鷹のオオムラサキ

六月十五日、ぼくは山梨サントロリーウイナリーへ、「オオムラサキ（日本の国蝶）」を採りに行つた。この日は、十一頭ものオオムラサキが採れ、意気ようよく帰ってきた。

その日の次の日の夜、ぼくは、オオムラサキの夢を見た。ぶたいは、いきなりぼくの家（ぼくは三鷹市野崎に住んでいる）のとなりの林だった。夢の中のぼくは、いつも林に行く時と同じように、虫網と毒ピンを持ち、林の中で、甲虫（カブトムシやクワガタムシなどの仲間）を探したり、蝶を追っかけまわしていた。そこで、夢の中のぼくは、一本のクスギの木が目に入った。その木には、カブトムシやクワガタ類、ルリタテハ（蝶の仲間）やスミナガシ（蝶の仲間）や、スズメバチ、その他、沢山の虫がいた。その中に数十頭ものオオムラサキも樹液を吸っていた。夢の中のぼくは、こうふんして、体がふるえていた。そして、虫網をかぶせたら、なんと全部、入ったのだ！オオムラサキも三角紙の中に入れられた。カブトムシたちも毒ピンの中に入っ

た。そんな時に、この夢は終わってしまった。ぼくは、

「三鷹に、本当にオムラサキがいたらなあ」

と思った。

(F3)

次のG1G2G3の資料は、F1F2F3が五年生であり、この三者はみな六年生であるが学年差で分類したのではない。偶然そうなったままで、高学年のもう一つの特徴としてG1G2G3の資料を挙げる。

六年男 夢(玉川)

僕の夢は、夢の中の自分が、現在の自分が星空を見ながら、すやすやねむっているのを見ながら始まります。

そのベッドにのっている自分が、夢の中の自分が望遠鏡の中からのぞいていて、ベッドが下に落ちていき、ゆらゆらゆれながら、宇宙の中をさまよいつづけるながら、下に落ちていき、なんとなくへんなテレビで見たことのあるような敵が現れ、やられそうになった時に、目がさめるのです。

(G1)

六年女 自分の見た夢(玉川)

私は一回、とても印象に残った夢があります。それはどうしてかというところ、カラーばんだったからです。ふつうの夢は、

全体が黒白に見えます。この夢はこういうのです。

気が付いてみると、言葉がしゃべれる犬とねことにわとり数羽といっしょに、逃げていました。なぜ逃げているのか、何が追ってきているのかは、わからなかったけれども、ともかく、その追ってきているものは、敵で、自分に害を出すものだとわかりました。まわりは、私の家の近くで、それがマンガ化したみたいで、へんな所に木があったりしました。私たちは、木のしげみにかくれ、その追ってきた物が、遠ざかっていくのを待ちました。それから後のことは忘れてしまったけれど、追われた時、とてもこわかったことと、まわりがマンガみたいだったところが印象に残りました。

(G2)

六年男 夢の中の異空間(聖徳)

僕が見た夢の中で、よく印象に残っているものと言え、ほとんど怖い夢で、なぜか喜んだりする夢はあまり見ない。

それに、性格的にも怖いことはよく覚えているタイプなので、今までに一番よく覚えているものと言え、まさに一番恐いものだった。

それは、まだ僕が小学校にいて、今に比べれば、体も心も共に幼いはずなのに、その時見るにしては、ずいぶんひどい夢

だったと思う。

まず背景としては、特ににも変わったことのない道で、母と、近所の友達と、母とが、井戸ばた会議をしているのだが、今にして思えば、その道に見覚えがなく、最初から不思議なストーリーだ。

ぼくもついてきていたのだが、そのうちにおもしろくなくなつて、どこかへ行ってしまふ。母たちは心配もせず、だからと井戸ばた会議を続けている。つづく夢は変な世界だと思ふ。

歩いているうちに、いきなり大きな城につく。みはりには誰もいないし、戸もあいていたので、何のためらいもなく入っていく。中は薄暗く、とても不気味なのに、どこにあれほどの勇気があったのか、と思ふ。

そして、前に大きな戸があり、そこに入っていくのだが、入っていくとしたとたん、落とし穴にはまり、どんどん落ちていく。さすがにもう恐くなったが、今さら城から出られる手だてもないので、しかたなく落ちていく。

ある程度落ちたあと、小さな平らなホールのようなところに落ちるのだが、なんとそこは、地獄のような、血の池地獄で、骸骨もたくさん浮いていて、さらに殺人鬼のようなナイフを持った男が近寄ってくる。その恐ろしさは、あまりの恐

さのため、今も鮮明に覚えている。
そしてその殺人鬼が、僕まで殺そうと、
かかってきたので、「ギャー」と大声を
出して、目が覚めたのだが、自分が殺さ
れる時の恐怖といえ、今でもゾッとす
る。

本当に、もっといい夢を見たいと思う。
(G3)

G1G2G3に混用される「自分」の用語
からでも察せられるが、F1F2F3と異な
るところは、夢を解説する姿勢があることであ
る。夢を見ている最中において、夢見ている
ことを意識しているから、夢を作文するとな
ると、夢解説になるのである。

このことは、またG1G2G3の資料だけ
では、成熟し、確定し切った状態に達してい
るとまではいえず、まだ動揺しており過渡期
的とも思われ、次の段階を知りたくも思われ
るが、私どもが採集した資料ではここで限界
となった。

G1の如く、「僕の夢は、夢の中の自分が、
現在の自分が、星空を見ながら、すやすやね
むっているのを、見ながら始まります」とあ
る。主体客体のとりにくい文章であるが、案
外これが本場で、僕は対社会用語、自分は対
自己用語の区別があるのかもしれない。

G2でも同様の使い分けがなされている。
特に、G2の表題にそれがあるのも、「気が
ついてみると、言葉がしゃべれる犬とねこと

にわとり数羽といっしょに逃げていました”
と文中にあるように、夢の中の登場者として
の私を、観察している自己との関係において
把えているから、殊更に「自分の見た夢」と
断ったものといえよう。

G3では、G1G2の立場がもう少し確定
している。しかし、「夢の中の異空間」とい
う表題ほどには、その異空間が説明できては
いない。「まず背景として」とか「今にして
思えば」とか「つくづく夢は変な世界だと思
う」とか、たしかにその「異空間」の意識構
造に迫ろうとしている気分はわかるが、過去
に見た夢分析を試みており、夢を見ている中
でそれが問われているのか、夢を見終ったの
ちの考察なのが判然としない。

G1G2G3の資料は、夢を見るとは、自
分の意識を見ていることに他ならない段階に
達しつゝあることを示している。

3

以上の如く、小学生の「夢」作文を通覧し
て、それを成長あるいは発達と呼んでよいか
どうかは今後の検討を待たねばならないとし
ても、少くとも、大略の年齢的成長にともな
う通性があることだけは、確かである。

今日の「個性」呼ばわりには、一方に通性
を求めない。あれほど、「発達段階」という
言い方が慣用される時代となったのに、現代

の個性論義は、恰も変種を求め、変異をそれ
だと思ってしまうている。よく言われるよう
に、人それぞれ顔付が異なるように、個性は存
在すると。誤解が生ずるのは、顔付は変って
も、それが人の顔でなければ化け物であるこ
とを忘れてしまうからである。

私たち教育者が求めている個性は、決して
変種でもないし、化物であろう筈はない。個
性が正しく把えられるためには、通性がわか
らなければならぬ。

その昔、エロ・グロ・ナンセンスと呼ばれ
た流行期があった。当今と比較すれば、物の
数ではない。このことは昔は古くさかったと
ばかり片付けられるかどうか。流行を測る基
準、つまり通性が健在であったのではないだ
ろうか。

柳田国男は非凡よりも並みの価値を見出そ
うとした最初の人である。民俗学とはそいう
学問なのである。非凡にあこがれるのもま
た凡人の常であるけれども、非凡は凡上であ
って凡下ではない。只今の流行の「個性」は
凡上凡下の見分けも出来ない。人目に立つと
いうだけではないのか。そのような個性呼ば
わりの中で一つだけ言い得て妙と思われる用
語がある。(個性俳優という言い方である。
個性俳優は個性を演じることに巧みな俳優の
ことであって、その俳優自身の個性を言っ
ているわけではない。ここで大事なことは、も
しある俳優が、その役どころの個性を、独り

よがりに設定して演じたとしても、おそらくその俳優に「個性俳優」の尊称は贈られることは無いということである。つまり、観客の大半が、その役どころの個性をよくつかまえていると認めることにおいて、この用語は成立しているのである。またこの「個性俳優」のことを「生活俳優」などと言い換えられている時がある。おそらくこのことは、個性を生活感性の表現の仕方と同一に観ているからであろう。

今、教育思想史の上に、個性尊重の提言やその考え方がいっどう台頭して来るのか、ここで復習している余裕はないが、人格、人道、生活信条等々の理想主義的立場からの人間接近であったことに誤りはない。

その一つの実証として、創設期の玉川学園が、個性をどう把握しようとしていたかは、大いに参考になると思うので書き留めておきたい。「昭和十二年」の記入のある小学部の生徒手帳の十四頁に「個性調査」欄があり、生命形態、意志傾向、感情傾向、理知傾向の四事項を、I II III IV Vの五学年に分けて記入欄がある。(なぜ六学年を省略してあるのか未詳) 学科は、進度と評点で記し、一般公立学校と異なる点は、自由研究、労作を課している。他に身体状況、出席状況を加えてあるところは、一般の通信簿と当時呼んだ形式と大差ないが、その最終に近い十八頁には全人評欄を次のように設けているのは画期的なものとい

うべきである。

右の基本的な考え方は現代風潮としての個性の把握が、大きく見失い、あるいはすっかり忘却している重要問題ではないだろうか。ことばは古いかもしれない。しかし、徳操と才幹とは、個性を把えさせるこれ以上の座標軸を少くとも筆者は今のところ見つけるこ

とが出来ない。
 平成新指導要領目標にいう「思考力や想像力を育てる」の方がわかり易いという向きもあるが、もし今日の教育に子どもを本性を把えようとする宿意が残っているとすれば、この先人たちが残した座標軸を捨ててはならない。

(玉川大学教授)

全 人 評

学年	I	II	III	IV	V
徳 操					
才 幹					
学 課					
自由研究					
労 作					
身 体					
備 考	A ^a A ⁺ A B ⁺ B C D 欠点 五 点 六 点 七 点 八 点 九 点 一〇点 一〇点以上				